

氷河時代の人類文化を 最古の手技「石器」から解明



文学研究科 歴史科学専攻 日本史学講座
考古学専攻分野 教授

阿子島 香 AKOSHIMA, Kaoru

1955年白石市生まれ。米ニューメキシコ大学大学院人類学研究科博士課程修了。考古学、先史学。旧石器時代を中心に、石器使用法などの研究、考古学における比較文化的研究を進めている。東北大学文学部助手、講師、助教授を経て現職。

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/archa/home.htm>

現代人にとって「石器」からイメージすることはなんだろうか。今を去る200万年前の旧石器時代、人類は火を保つ技術よりもはるかに古く、石の道具を作る技術を得ていた。石を打ち欠いたり、剥ぎ取ったりして作られた石器を手がかりに、当時の人間の活動や生活文化を究明することが阿子島香教授の「使用痕分析」という研究テーマの一つだ。

石器に残るわずかな傷(使用痕ポリッシュ)を顕微鏡で観察し、再現実験によってできた傷と比較することでその傷がどのように付いたかを調べるのである。この方法によって、例えば、新潟県荒屋遺跡から出土した「彫刻刀」という石器は、動物の骨や革の加工などに使われた刃物だったことが判明した。自然界に残った石器と、実際に動物の革に突き刺したり、たった今傷付けたばかりの再現石器。ほんの小さな欠け具合一つで、当時の世界を形作る大きな要素になっていく。不思議なことに、歴史的つながりがまったくない国々で出土した石器にも同じ使用痕が残っている。同じ働きをする石器は場所や時代

を超えて類似するものであるらしい。

阿子島教授が進める「人類学としての考古学」は、プロセス考古学の創始者ルイス・ビンフォード先生の理論に基づいている。自分の国の歴史を明らかにするだけでなく、人類学の一分野として比較研究を重視するもので、同じ環境、同じ時代背景の中で人類集団がどのように環境変動に適応していったか、その普遍的な経験を明らかにし地球的な視野で考える。これは、1980年代から東北大がいち早く手がけてきた分野である。遺跡の地球比較文化、方法として石器の使用痕分析。その到達点は、両者を結合させて新たな展開を進めていくことである。

遠い過去に人類が刻み込んだ記憶を追体験していくような作業。時間も空間も超えてシンクロしてしまう息の長い考古学。そこには、国際学術交流、組織的な技術や高度なチームワークが必要になる。阿子島教授は、大事なことは現場主義と現物主義だという。理論的な人類学としての考古学を着実に後進に伝えていくこともこれからの課題だ。



阿子島教授を中心とした東北大学使用痕研究チームの主要メンバー。日本の旧石器研究の指導者として活躍された芹沢長介先生の実証的な研究の伝統を受け継いでいる。



デジタルマイクロスコープやレーザー顕微鏡、金属顕微鏡を使い、石器に残る使用痕を観察し、複製石器と比較する。微小剥離痕、線状痕、摩耗光沢など、わずかな痕跡も見逃さない現代考古学は科学捜査やプロファイリングのよう。石器の使用痕研究という分野は1980年代から東北大研究室が世界的にリードしてきた分野。日本国内をはじめアジア各国でも標準的な方法として東北大の方法が使われている。



600~700事例に及ぶ対照資料が整理された引き出し。条件を設定した実験対照資料を持つ大学は日本では数少ない。研究を支えてきた重要な考古学資料も数多く収蔵している。



「彫刻刀」という石器の使用痕ポリッシュ(新潟県荒屋遺跡出土・後期旧石器時代)。動物の骨や鹿の角の道具製作、皮の加工などに使われた痕が残っている。

My favorite

東北地方の考古学の遺跡発掘では一番主な材料「頁岩」や「黒曜石(火山ガラス)」。毛皮は、石器を押し付けて加工する際クッション材。弾力があるし、怪我をしない。叩いて石を割るための鹿の角製剥離具、ハンマーストーンなど、石器を実験的に用いる際の道具。「実験してみますね、きちんと痕跡が残るんですよ」と阿子島教授は再現石器を作ってみせてくれた。

